

ときに癒し

令和という新しい元号になって1カ月が過ぎた。世の中がお祭り騒ぎ(ことにマスコミ関係)になっていたが、4月下旬より5月上旬にかけて大型連休になったことで、医療関係者は診療体制をどのようにするのか苦労したと聞く。それ以上に、患者がもっとも迷惑したのではなかろうか。それらも一段落し、新しい元号とは関係なく淡々と毎日の診療が続いていることと思う。

春は人事異動のある時期であり、新しい仲間が加わり雰囲気が変わった施設もあることだろう。その仲間が早く職場の環境に慣れて活躍して欲しいと願っている。一方で、新しく医師になった新人に対しては学問の流れが早くなっている中で、いかに育ててゆけばよいのかという指導者側の悩みは尽きない。卒後の教育カリキュラムを作成し、それに沿った作業が行われていることであろうが、日進月歩の医学的知識については先輩から教えてもらうというよりも共に学ぶという姿勢が求められる。教科書から早く脱出して、新しい情報を得ることが重要になる。そのためにも学会に出席することや情報源となる雑誌を手に取り、熟読することが必要になる。また、診断・治療をするうえでの技術は早いうちに習得し、日常の診療に支障をきたさないようにしてもらいたい。むずかしいのは医療行為が患者という心を持った人間を対象にしており、その患者との関係をどのように進めてゆけばよいのか、という問題である。同じ治療をしていても患者によっては捉え方が異なることがあり、治療効果が変わってくることを経験する。

米国のトルドー療養所にあるトルドー医師の像の台石の背面に「ときに癒し、しばしば支え、つねに慰む」の文がフランス語で刻まれていると聞いたことがある。この文の出所は不明とのことであるが、トルドー医師の医療に対しての姿勢を伝える言葉として有名である。

急性の疾患では原因を取り除くことにより容易に治癒させることができ、人と人との関わりにはとくに問題なく終わるが、原因不明の慢性疾患や予後不良な疾患を持つ患者と接する場合には患者の心理的な動きを考慮せねばならず、たいへんな努力が必要になる。患者を癒し、支えるためには医療関係者が知識、技術を高く持つことが要求されることは当然であるが、そのうえで患者に寄り添った医療を行うための心の支えが求められる。さまざまな性格を有する患者に対して柔軟に対応することはたいへんなことであるが、患者の心理を理解し、対応について苦労することも診療の楽しみの一つにしてもらいたいものである。

6月には秋山真志教授を会頭にして第118回日本皮膚科学会総会が名古屋市で開催される。多くの新しい情報が得られるものと楽しみにしている。令和の時代が診療の上にも学問の上にも飛躍的な進展をもたらすことを望み、診療に少しでも役に立つさまざまな情報を本誌からも発信したいと考えている。